

---

# 世継ぎ問題（仮）

佐々木 沙女

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世継ぎ問題（仮）

### 【Z-ONE】

Z6663Z

### 【作者名】

佐々木 沙女

### 【あらすじ】

優秀で民に慕われている女王陛下が治める帝國、しかし、世継ぎが居ない問題が勃発。彼女が中々踏み出せない問題だったが……。

## その1（前書き）

こつまでも続けられるか、わかりませんが。

「陛下。いい加減にして下さい。

わづ、この事は国をあげての一大事なのですから。」

「分かっている。」

「お分かりなら、何故私の意見を聞いて頂けないのでしょうか……」

宰相様お可哀想に……と誰しもが同情の眼差しでみていた。

「いつも言っているではないですか、世継ぎがいないのですから、  
養子なりるとか……」

なんなら今からでも産みますか？」

「それもいいかもな」

「はづ、やうですか。じゃあ、やつをひと相手見つけて産んでください。

いつもの様に宰相様が、はぐらかされて終わりだ。  
しかし、今日は違つた。

「ジル。

その問題だが、解決しようと思つ。

四公を呼んでくれ。」

あまりの驚きに、宰相ことジルバート・スチュワートは思考が止まつた。

「えつー？本当にですか！？！」

「ああ。」

間髪入れずの返事に、今度はその話を聞いていた者達が驚きの声をあげた。

『四公』とは、大貴族である。

大貴族とは、北のアルバース公爵、南のクラウス公爵、東のグルーヴィー公爵、西のステリア公爵 を総称して『四公』と呼ばれる。

数日後。

王の執務室に、四公が集まつていた。

北のハルビル・アルバースは代々武将の家柄で、体格のよい大男。黒髪の短髪で顔には傷がある。

「ジルがとうとう陛下が腹を決められたと言つていたが、本当か？」

南のブラウン・クラウスは、知識人の為学問に多くの力を注いでいる。少し長めの胡桃色の髪で、眼鏡を掛けている。

「ええ。私にも実に嬉しそうに話しておいででしたが。」

東のアマリリス・グルーヴィーは、四公の中で唯一の女性である。本来ならば、男性継承である公爵家を継ぐ事を特例で認められている。栗色の長い髪で、可愛い顔をしているが中身は…。

「ジルの被害妄想でなくて？」

いつも、あの御方はジルで遊ばれているじゃない。」

西のジーク・ステリアは、最も領民からも慕われている。ある意味顔で…。茶髪で派手な顔立ちをしている。若い頃はさぞかし遊んでいたと言つ噂。

「さあ、それは我らが陛下に会つて見ないと眞実は分からぬよね。

「

執務室の扉がノックされ了承の返事もなく開いた。

この部屋の主であり、ライヴィ国の中でもある国王 ティアナ・ラグナロス が金髪の長い髪を靡かせながら、宰相ジルを伴つて入つて来た。

「わざわざ遠い所を、すまないな。」

「いいえ、陛下のお召しおあいば私はどんなに遠い地に届りましても、すぐに飛んで参りますわ。」

「アマリリスの陛下顕眞がまた、始まつたな。」

陛下に引っ付いて離れないアマリリスを皆が呆れた様子で見ていた。陛下は宰相に用配せし、何とかアマリリスを落ち着かせて、椅子に座らせた。

ティアナは疲れた顔で、紅茶を一口飲んだ。

「今日集まつて貰つたのは、ジルから聞いていたと思つが……」

「では、お決めになられたのですか。」

興味津々な顔で、クラウス公が尋ねた。

「どうしたらよろしく思つ?」

「はつ?」

「……。」

部屋の中に静寂が訪れた。

部屋の中に静寂が訪れた。

一番早く正氣に戻った宰相」とジルは、沸き上がる怒氣を抑えることが出来ず叫んだ。

「陛下あ！！

あなたつて人は、毎回毎回私で遊んで良いと思つてんですか——！

「楽しいではないか」

「…………。」

四公達は、また陛下の宰相弄りが始まつたと、微笑みを浮かべその場が和んだ。

本人は、ジルの怒りを気にもせず優雅に紅茶を啜つていた。

一頃り陛下の愚痴を言つたことで、宰相」とジルは落ち着きを取り戻した。

同郷の誼よしみでハルバース公が最後まで、聞いてあげることは最早お約束である。

「さて、恒例のジル弄りも終わつたことだし、陛下そろそろ本題に入つて頂けないでしょうか？」

「ジーク、お前は私に話かけるなといつも言つているだらうが……！」

ステリア公」とジークが、陛下に話しかけた事によつて部屋の温度が一、二度下がつたのは氣のせいではない……。

ステリア公と陛下は仲が悪い。

昔はそれほどではなかつたのだが、いつの間にか一人は犬猿の仲になつていた。原因は不明だ。

「まあまあ、落ち着いて下さい。

あなた方がケンカを始めてしまつたら、終わらないでしょう。」

言葉は優しいが表情が怖い。

「『ごめんなさい。』

ブラウン・クラウス公は普段は優しいが怒らせると、恐ろしい目にあうと経験上分かつてゐるので直ぐ様二人は謝罪した。

咳払いをし、

「早速、本題に入る。

以前からジルや皆が心配している世継ぎだが、そなた達の子を貰えないだろうか？」

「私は喜んで差し上げますわ。私と陛下の結びつきが益々強くなりますわよね。」

アマリリスが、嬉々として言つた。

。

「クラウス公、アルバース公、ステリア公 アマリリスはこう言つてゐるが、別に強制ではない。意見を聽こう。」

思案顔でクラウス公が発言した。

「それは我々だけの一存では申せません。

本人に聞いてみなければお答えしかねますが。

クラウス公の意見にアルバース公、ステリア公も賛同した。

「それは最もだ。

本人に国を受け継ぐと言う強い意志がないと、民が哀れだ。」

ジルに目配せし、皆の前に紙を置いた。

「一通りの条件は書いておいた。それを基に検討をしてくれ。」

一ヶ月後此処に何人集まるかな？

と、意地の悪い笑顔を浮かべ皆を見送った。

## 国王の条件

四公に渡された書面の、一部抜粋。

- 、国を愛すこと
- 、民を虐げない
- 一、公爵家の後継ぎではない者
- 、男女問わない

執務室を出た後、控えの間に来ていた。

「何だこんな簡単でいいのか？」

条件を読んだ後、拍子抜けした。

「ハルビル簡単が一番難しいのですよ。」

ため息を吐きながらアルバース公に注意した。  
単純だからこそ、おろそかにするが出来ない。おろそかにすれば民  
は離れていき、国などなくなってしまう。

「うつ、分かっているよ……、多分。」

深く考えずに言つた事に、反省した。

「そうね……。陛下の中に常にあるのでしょうかね。」

國などに縛られて、可哀想な人……。」

最後の言葉は、憐れむものではないが、彼女の本心だったのかも知  
れない。

「…………」

「ところでジークは、何処行つたんだ?」

「そうね。

来る時は一緒に居たはずなのに、いつの間に…」

「さあ、愛しい人にも会いに行つたんじゃないですか?」

天気は快晴。  
まるで未来ある若者達を応援している様な天気だなど、ティアナは  
思った。

謁見の間に正装し玉座に座る彼女の前には、決意を決めた者達が居  
た。

北のハルビル・アルバース公の三男 ビルズ・アルバース（14）  
焦げ茶色の少し長めの髪で、母親似な彼はそわそわと落ち着きがな  
い。

東のアマリリス・グルーヴィー公の長女 マリア・グルーヴィー（  
15）母親譲りの栗色の髪で可愛い顔をして、堂々としている。

西のジーク・ステリア公の長男 カイル・ステリア（16）金髪で  
甘い顔立ち、父親似ている。

同じく長女 リリア・ステリア（16）茶髪で兄と同じ顔している。  
双子だ。

南のブラウン・クラウス公は、適任者がいないと断りがあったのを  
了承した。

全員が揃つたのを確認し、陛下が挨拶を始めた。

「まず、皆の気持ちに感謝の言葉を贈ろう。

ありがとう。」

深々と頭を下げる。驚いた。

国王が下の者に頭を下げるなど聴いた事がない。

少しの動搖を感じとつたティアナは

「この礼は国王としてではない。

ティアナ・ラグナロス個人が感謝を述べるのだ。」

世継ぎが原因で、要らぬ苦労を掛ける若者達にせめてものお詫びの気持ちを込めて…。

「事前に報せた通りこれから城で、勉学に励んでもらいたい。早速、明日から始めるに当たつて何か質問があるか?」

勢いよく手を挙げたのは、マリア・グルーヴィーだ。質問したくてさつきからウズウズしていた。

「お聞きしたいのですが、何故ステリア公だけお一人なのですか?マリアの質問は謁見の間に居る誰しもが思つたことだ。条件には一人だと決められていたはずなのに。」

「私もお聞きしたいのですが。」

ステリア公にお子様が二人のはず、どちらかが公爵家の跡継ぎですよね?」

宰相ジルも、困惑氣味に聞いてきた。

「一人だと言つたんだかな?」

ステリア公もどちらに後を継いでもらうか悩んでいると言つていた。両方優秀であるが為に決めかねていたらしい。

そこに今回の話が舞い込んできたので、これ幸いにと二人を送り込んできた。

もし双子のどちらかが選ばれた場合、選ばれなかつた方が領地に帰り後を継ぐ事になつてゐるそうだ。

あまりに粘るので、全領民の了承が得られたのなら特例として認めると言つた。

「それで、これが結果だ。

あいつの顔に領民は、騙されている。」

ティアナは不貞腐れてしまつた。

不可能を可能にする男の子だ世継ぎにはぴつたりなのかも知れない。  
と周囲の者達は密かに思った。

「君達の未来が、この国を書き方向へと導いてくれる事を願う。」

## ビルの決意

ビルズ・アルバースは、ハルビル・アルバース公爵第6子としてこの世に生を受けた。

女3人、男2人子沢山なアルバース公ではあつたがビルを可愛がっていた。

母、兄や姉達も年の離れた弟を可愛がった。

末っ子で可愛がられてはいたが、我が儘にはなれなかつた。忙しい家族を気遣い、家で大人しくしていた。

その性が、人見知りが激しく家からあまり出なくなつっていた。しかし、いつまでもこんな性格ではダメだと感じていたが自分では、どうにもきつかけが掴めなかつた。

そんな時に今回の話が舞い込んできた。

「ビルズ。

あのさ、陛下に頼まれたんだけど、お前さえ良ければ、俺はビルズを推したいと思っているんだかどうか?」

父が僕をおしてくれるだなんて、驚いた。

まだまだ、小さい子供扱いだと思つていたのに、嬉しかつた。

「父上、僕でいいのですか?」

「ああ。

お前はまだ小さいが将来は大物になりそいだからな。」

笑顔で頭を乱暴に撫でられた。

「ゆっくり考えるといい。但し、自分の可能性を諦めるなよ。」

父の最後の言葉が突き刺つた。

その後の事はあまり覚えてない。気付いたら自分の部屋にいた。

父には自分の悩みなど筒抜けなんだなと、窓から覗く月を眺めた。

いつまでもそうして居たかつたが、来客を知らせるノックが響いた。

入つて来たのは、母だった。

「ビルズ、あなたご飯も食べないなんて心配するじゃない。」

「ふりふり怒りながら、夜食を持ってきてくれた。」

「母上、すみません。食欲がなくて…」

「旦那様が言つた事気にしてるのね。」

「……。」

「貴方が産まれたのが遅かつたじゃない？」

「旦那様は上の子達が産まれた時、お城で仕事していたから一緒にいました。だから、子育ては私任せでね。貴方が出来たつて分かつた時、自分が育てるんだってはりきつたのよ」

可笑しそうに、笑いながら語つてくれた。

初めて聞く自分が産まれる前の話。

「こつちに戻つても忙しさは変わらなかつたけど、少しでも時間が出来ると、貴方の顔を見に来たの。」

私どもが好きなのって、喧嘩した事もあつたのよ

何だか容易に想像出来てしまつ夫婦喧嘩だ。

最後はお前が一番だよつて言つてくれたのよつて恥ずかしそうに告白した。

「あなたは私達の自慢の息子なのだから、自信を持ちなさい。」

言つだけ言つて母は部屋から出でていつた。

心配をせてしまつた。

母は元気のない僕を気遣つて励ましてくれた。

小さい僕の世界を広げる為に父なりに、考えててくれていた。後は自分が決めるだけ、心が少し軽くなつた。

お腹すいた。

その日の母の、ご飯がいつもより美味しい感じた。

「いってきます。」

「いつでも帰つていらっしゃい。

待つてるから」

優しい母の言葉に見送られて旅立つた。

「はあ。もうダメ。  
どうしてあれが赦されているのかわからないわ――――――  
マリア・グルーヴィーは叫んだ。

「まあまあ、お姉さま落ち着いて下さいな。  
一つ下の妹アリア・グルーヴィーは、姉の苛立ちの原因が分かるら  
しく優しく声をかけた。

「アリア、私は我慢の限界なの――――――  
！」

バンバンと机を叩いて憤っていた。

「あなたはいいの？」

「いつも言つてるではありますか。  
人それぞれなのですから、私達が何を言つても変える事は出来ない  
と。」

姉のマリアは、気性が激しい、妹のアリアはおつとりとしている。  
姉妹は正反対の性格をしていたが、仲がよかつた。

「それに陛下が赦されているのですから。」

それがそもそもの原因だ。

何故、容認されている。國家規模の陰謀、それとも、もっと別の何  
かなの。

一人悶々と、考えを廻らせていると

「そうそう。

それに、母さんが折れる訳ないよ。」

今まで傍観していた一つ上の兄アギト・グルーヴィーが話に入つて  
きた。

「母さんなんて呼ぶんじゃない――――――  
！」

マリアは母アマリリス・グルーヴィー公爵のことで怒っていたのだ。  
と言つてもマリアが一方的に怒つて いるだけであつて、アマリリス  
は気にもとめて いない。

兄のアギトが何気なく言つた。

「それならいつそ王様にでもなつたら？」

「そんなの無理に決まつてんでしょう。」

と、その場は笑い話で終わつた。

後に、この話は現実に近いものとなるのは今はまだ誰も知らない。

## カイルの焦燥

俺には双子の妹が居る。

多分、仲は悪くない。

しかし、今は少し距離をおいている。

喧嘩した訳じやない。

ただ、俺たちの間に問題が生じた。

15歳の誕生日に、いきなり親父は妹と俺のどちらかに家を譲ると  
言い出した。

公爵家は、代々男子優勢で継承され、一部例外は除き、みなそれに  
倣ってきた。

順当にいつたら次のステリア公爵は俺のはずなのに。

「優秀な方に継いで貰いたいしさ。

それに地位に、甘えて欲しくないんだよね。」

軽い口調で言つてはいるが、親父の言葉は重みがあった。

確かに昨日までは俺が家を継ぎ、妹は何処かへ嫁いで行く。  
それが普通だと思っていた。

「カイル兄さんに何か不満でもあるんですか?」妹の声に我に還つ  
た。

「別にないよ。」

「なら、どうして?こんなことに意味はありません。

妹ははつきりと拒絕した。

「じゃあ、家から出ていきなさい。

カイルも不満なら出ていっていいよ。」

親父は、本気だ。

俺達は所詮子供だ。

公爵家と言つば値値が在るから大事にされているだけで、庶民の子達

と変わりはない。

”了承”の答えしかないのだ。

16歳の誕生日にまた親父の言葉に驚かされた。

聞き間違いに決まっている。そんなことはあり得ない。

「だから、一人にお城へ行つて陛下の世継ぎになつて欲しいんだよね。」

「……。」

妹と顔見合させて驚いた。

「許可は貰つたから、遠慮なく行つておいで。」

上機嫌で語つてくれた。

ステリア公爵はどうするのか聞くと、陛下が選んだ後に決めるそうだ。

馬鹿らしくなつた、今まで親父に認められる後継者にならつとしていたのに、無駄だつたんだと悟つた。

「俺は行かない。」

もう親父に振り回されるのは、『めんだ。』

自分から出でていつてやる。」

扉に手を掛け、出でていこうとする親父の声に振り返つた。

「お前達、母親に会いたくないか？」

「！－！」

親父から、母親の話が出るなんて意外だつた。

母親の事を聞いても一切教えてはくなかった。

ただ、そばに居なくとも愛されてると言つただけだつた。

「世継ぎの話と母親が関係があるんですか？」

「勿論。」

関係なかつたら言わないよ。

どうするカイル、リリア？」

親父の方が一枚も上手だった。敗けを認めるしかなさそうだ。  
”了承”の返事をした。

「お城に居るよ。

後は自分達で探しなさい。」

出発の日親父から俺は万年筆、妹はネットクレスを貰った。

母親から初めての誕生日プレゼント。

## リリアの困惑

私には双子の兄が居る。

仲は良い方。

今は、ギクシャクしてはいるけど嫌いじゃない。

そもそも父様の突拍子もない発言が原因だから、ため息が出る。

15歳の誕生日に、いきなり父様は兄と私どちらかに家を譲ると言い出した。

公爵家は、代々男子優勢で継承され、一部例外は除き、みなそれに倣つてきた。

順当にいつたら次のステリア公爵になるのはカイル兄さん。

「優秀な方に継いで貰いたいしさ。

それに地位に、甘えて欲しくないんだよね。」

いつもの調子で言つてはいるが、父様の言葉は怖かった。

兄が家を継ぎ、私は何処か良い縁談に恵まれて嫁にでも行くものだと思つていた。

公爵家を継ぐだなんて考えもしなかつた。父様の意図が解らなかつた。

「カイル兄さんに何か不満でもあるんですか？」  
不満げに聞いてみた。

「別によ。」

「なら、どうして？こんなことに意味はありません。」

「冗談じゃない。遣りたくもないことをしたくない。」

「じゃあ、家から出ていきなさい。」

カイルも不満なら出ていつていいよ。」

父様は、本気だった。

私達は子供だ。

家を出ては生活出来ない。

こう言われて仕舞えば選択の仕様がなかつた。

”了承”の答えしかな出なかつた。

明日からの苦労を思えば、誕生日を素直に喜べなかつた。

16歳の誕生日にまたもや、驚かされた。

世の中あり得ないことばかりだ。

「だから、一人にお城へ行つて陛下の世継ぎになつて欲しいんだよ  
ね。」

「……。」

兄と顔見合させて驚いた。

「許可は貰つたから、遠慮なく行つておいで。」

父様は上機嫌で語つてくれた。

兄がステリア公爵はどうするのか聞くと、陛下が選んだ後に決める  
とのこと。

何だか可笑しくなつた。

笑えなかつたけど、酷く可笑しかつた。

「俺は行かない。

もう親父に振り回されるのは、”めんだ。

自分から出ていつてやる。」

扉に手を掛けて、出でていこうとする兄に続けて足を踏み出す。

「お前達、母親に会いたくないか？」

「！――！」

父様から、母様の話が出るなんて…。

ステリア公爵家では触れてはいけない話の一いつだつたのに、自分から話を切り出すって、このタイミングに意味はあるの？

「世継ぎの話と母親が関係があるんですか？」

「勿論。

関係なかつたら言わないよ。

どうするカイル、リリア？」「

今、聞かなかつたら母様の話は永遠に聞けない様な気がした。会つて話がしたい。

”了承”の返事をした。

去年の誕生日より明るい気持になった。

「お城に居るよ。

後は自分達で探しなさい。」

たたそれだけ、でも一步前進した。

出発の日父様から兄は万年筆、私はネックレスを戴いた。

母様から初めての誕生日プレゼント。

世継ぎ候補達と面通りを終え執務室に戻った国王ティアナはソファに座り疲れた顔をした。

黙つて後ろを着いて来ていた宰相ジルは、紅茶を入れた。いい香りに顔を上げたティアナは礼を言い、口に運んだ。

「どうだ、ジルのお眼鏡にかなつた奴はいたか?」「面白そうに聞いてきた。

少し思案して

「そうですね。

マリア・グルーヴィー様とかいいたいと思います。」

「そうか。」

「」不満ですか。」

言葉に棘が感じられる物言いだった。

「マリアには、望みがあるようだ。しかし、小さい。國を望むようならもつと大きく、もつと貪欲にならないとこけない。」

「マリア・グルーヴィーの望みが國家規模だったら、どうするんだと心の中で突っ込んだ。

その頃小さい野望を燃やしているマリア・グルーヴィーは、クシャミをしていた。

「陛下はどなたが有望だと思われたのですか?」

「今の時点では、いない。

それぞれ気づかなければ、王になどなれはしない。これからに懸かっているな。

鍛えてやれ。」

深々と頭を下げ了解の意を示した。

世継ぎ教育が始まった。

「皆様、野宿はお得意ですか?」

宰相ジルが語った試練とも言う教育に驚いた。

「城の後ろにある山に行つて二週間生活してもらいます。勿論、死なれては困りますので最低限のものは保証しますし、好きなものを持参してもらつて構いません。

単独でも、皆様でご協力してでも構いません。

二週間山で過ごして頂けたら終わりです。

途中で棄権なさつても問題ありません。

棄権の場合は、荷物の中に花火が入つてますので、それでお知らせ下さい。

お迎えに上がります。」

一通り説明し終え質問はありませんかと問うた。

マリア・グルーヴィーが一番に応えた。

「それは、陛下のお考えなのですか?」

「勿論です。」

言いきつた。

カイル・ステリアは

「皆で協力したから、または棄権したからと言つて評価が下がることありますか?」

「それないです。」

「絶対に?」

「絶対です。」

――――――――――

各自納得するまで、続けられた。

「それでは、明朝出発ですので準備をしてお待ち下さい。」

朝早くに、4人は静かに発つた。

その後ろ姿をティアナはテラスから眺めていた。

「お見送りに行かなくてよろしいのですか？」

「何のために、こんな朝早くに発たせたと思うのだ。」「

「そうですね…。

無事に戻られるでしょうか。」

「『『影』をつけてある。

問題はなかろう。」

『影』とは国王直属の親衛隊。

その名の通り影から陛下を守る。

暗殺など、表では出来ない仕事を請け負う、精銳部隊だ。

「『『影』ですか…。」

「さて、早速取りかかる。」

あの子達の為に、過ごしやすくしてやうねば。

要らないものを、片付けよう。」

優しい顔を外して、国王としての残酷な一面を覗かせた。ジルは、いつもながら見事な変わり様だと感心した。

その日、大規模な粛正が行われた。

世継ぎ候補者達が、王都に入る時に乗じてよくない輩も一緒に入つて來ていた。

王城にも間者が紛れ込んでいた。

それらを煽動した者達を裁いたのだ。

4人を城から出したのは、巻き込まれない為だ。

「しかし、一週間は長いですよ」

「いいじゃないか、私は1ヶ月も山にいたぞ。」

八つ当たり氣味に反論した。

二週間後、誰も途中で抜けることなく野宿は無事に終わった。度々危ない目に遭つたそつだか、皆で解決し仲を深めた。

いい顔つきになつて帰つて来たのをティアナは密かに悦んだ。労いの言葉をかけ、ゆっくり休むことを勧めた。

帰つてきた城内の雰囲気が変わつてゐるのに、気付く者はいなかつた。

執務室にて『影』から報告を聞いた。

「皆様、大変有望でした。

特にカイル様がリーダーシップを取り皆様を導いて下さつて、危険を回避致しまして……」

「いつもの様に喋つてくれ。気持ち悪い。

鳥肌がたつた。」

ティアナは見ると腕を差し出した。

「いつもより丁寧に話てんのが気に食わねえつてなんだ!!」

「そつちのが落ち着く。」

精銳部隊『影』の隊長クロウは、乱暴に言い放つた。

若干18歳にして隊長となつた彼は、優秀な人材ではあつたがティアナのからかい相手だ。

「何処まで言つたけか。」

がしがし頭を搔いて、そっぽを向いた。

「簡潔にきこう。

気に入つた奴はいたか?」

「……。」

「答えられないのか？」

即断即決な鬼の隊長クロウが、普段表情など読ませない奴が何故か落ち着きがない。

「そんなことはない……。

見込みはあるぞ。」

「ふうん。

好きな奴出来たか。大人になつたなクロウ。」

「なつな、に言ってやがる！――」

動搖して、かなりの汗をかいている。

明らかに図星だと言つている。

「冗談だつたんだかな。」

呆れた声で言つた。

「で、どつちだ。

マリア嬢か……リリア嬢

後者の方で肩が揺れた。

「……。」

「まあ、頑張れ。」

クロウは自分で一杯一杯だったので、ティアナがどんな顔で言つたのか見なかつた。

しどろもどろの報告をして、戻つて行つた。

最初の教育に不安はあつたものの、順調に進んでいった。

宰相ジルの講義は厳しかつた。

鍛練場での訓練では、マリアとリリアがやらないと一悶着あつたが粘り強く説得した。

その他にも、本当に必要なのか?と言つものまで様々あつた。

「いひ毎日あると、疲れますわね。」

「でも、僕楽しいです。」

休憩中に、交わされる何氣ない会話。

「充実した日々だ。」

「皆さんは、国王になつたら何をしたいですか?」

マリアが聞いてきた。

「望みがなれば、國の主になろうとは思いませんもの。」

「まずは、お前が答える。」カイルが低い声で応えた。

大それた話ではないのだけれども、と話始めた。

「グルー・ヴィー公爵当主の事を陛下にお聞きしたかったから。」

「ご当主にご不満がありますの?」

「悪い評判は聞いてないが。」

「政務には、問題はないのです。」

「ただ、あの姿が…」

と言われて皆、アマリリス・グルー・ヴィー公爵の顔を思い浮かべた。別に変わつた所はないはず、と想い至つた。

「あの人は『四公』唯一の女性何て言われていますが、」

確かに公爵家の女性当主は珍しい。歴史の中でも1、2人いるかないかだ。

マリアの次の言葉を聞くまでは。  
「ただの女装好きの男なのです。  
」

その場に静寂が訪れた。

「直接聞いてもらつても構はないぞ。」

いつの間にか、国王ティアナが傍に立つていた。

「マリアは、そんな事聞いたかつたのか？」

「はい。」

勢いよく起立し、礼をした。

皆も聞いたそなにしているので、ティアナは空いている席に座り給仕が入れた紅茶を楽しんだ。

「マリアは何故、アマリリスが女装しているか理由は知つているか？」

「いいえ。存じません。」

そう言えど、聞いたことがなかつた。

それならばと、昔話をティアナは始めた。

私が最初に会つたときはまだ、アマリリスは男の姿をしていた。

10歳前後だつたかな、奴に転機がきたのは。

私が何時ものように、遊んでいた時だつた。遠くで入りたそつだつたから、近くに呼んで仲間に入れてやつた。

「その遊びとはなんでしょうか？」

待ちきれずマリアが聞いた。

「女装だ。」

陛下の危なげな趣味を知つてしまつたのではないかと暗思つた。

嫌がる、男どもに無理矢理着せるのが、それは楽しくてな。侍女が言い出したんだが、やってみるとこれが中々。

奴も、犠牲者の一人になるはずだつたんだか……。

あいつは、自分の姿を鏡で見た瞬間叫んだ。

「美しいつ……！」

つて、自画自贊を始めた。

この世の中に自分より美しい人は、存在しない。などなど、尽きることはない。

ことはなかつた。

流石に侍女と一人で、これはマズイと思った、、が後の祭り。

公爵には悪いことをしたので、せめてもの償いに結婚相手を探してやつた。

別に男であることが嫌ではなかつたから。

ただ、妻の条件が自分より美しい人だつたのはキツかつたなど国王ティアナは笑いながら言つた。

「僕、女性公爵つて凄いと思つてましたけど、。。」

ビルズは困惑氣味だ。

「しかし、全然氣づかなかつたな。」

カイルは、女装でも仕事さえまつとうしてくれていれば、どうひらりでも構わないと思つた。

「結構、有名な話だがな。

古参の者は皆知つてゐるが、若い者は知らないのか…。」

「確かにお母様は、お綺麗ですが、。。」

マリアは、力が抜けた。

国王が容認にしてゐる理由が理由だけに、自分が考へてる女装廃止に支障をきたしかねない。

苦労が水の沫になつてしまつ。

「すまないな。

アマリリストには、辛いかも知れんが、どうすることも出来ないのだ。

だが、私が国王だがら赦されてゐる事を忘れるな。」

ティアナは口にはしなかつたが、次の王になれば女装廃止が現実味

を帶びてくる事を示唆した。

「有り難うござります。

今のお話を聞けただけで、満足です。」

といひで、と今まで聞き役に徹していたリリアが言った。

「ティアナ様は、どうしてこちに？」

何かご用がございましたか？」

ティアナは思い出したとばかりに、侍女に指示をだした。

「皆頑張つているようなので、労いと褒美を持つて来たのだ。」

侍女達の手でテーブルの上には、色鮮やかなお菓子や異国の珍しい菓子が並べられた。

「疲れているだろう？ そう言つときは、甘いものが一番だ。」

マリア、リリア、ビルズは目を輝かせていたが、カイルは嬉しそうではなかつた。

「……。」

カイルは甘いものが得意ではなかつた。

それが分かつてているのか侍女が、自分の前に箱をおいた。

「それは、美味しいぞカイル。お前の父親も喜んで食べている。」

目の前に出されたのは、緑色の物体だつた。

親父も甘いものが苦手なはずなのに、喜ぶとは。

そつと手で摘まんで口に入れた。

なんとも言えない味が、口の中に広がつた。

「気に入つた様だな。」

「はい。」

次々と口の中に消えていった。

「戴いてよろしいですか？」

兄が嬉しそうに食べているのでリリアも食べたくなった。

「ああ。」

皆、口にした途端なんとも言えない顔をして、紅茶を飲んだ。  
口には合わなかつたようだ。

「異国のお菓子で、抹茶、と言つてお茶の一種だ。  
砂糖や蜂蜜を一切使つてないから苦い。

私あまり好きではない。」

砂糖がたっぷり使われている、菓子を口に入れた。

カイルはこの時少し違和感を感じていたが。

美味しく戴いているところに水を差すような真似は、やめて今は菓子を楽しむことに専念した。

国王ティアアナは唐突に表れて言い放った。

「今日は、授業参観をする。」

優雅に椅子に、腰かけた。

「陛下。

今、大事な所なので邪魔しないで戴けますか？」  
宰相ジルは授業中に飛び込んできたティアアナを、追い出しに掛かった。

「邪魔はせん。

気にせず続けよ。」

「貴方が気にしなくとも、四人がしています。」

四人は、どうしたものかと二人のやり取りを見守っている。

「貴方に見られなくても、順調に進んでいます。

陛下には、執務の方を頑張って戴きたいのです。」

「急ぎのものはないから大丈夫だ。」

少しの押し問答が繰り広げられたが、ジルがティアアナに勝てるはずもなく、大人しくして置いて下さいと何度も念を推し、再開させた。

今日の授業は、歴代の国王についてだった。

「三代目国王は、税を重くし、重労働を課し、少しでも足らなかつたり休んだ者達を斬首にしていったのです。

国王は贅沢をするために民から暴利を貪つたのです。  
何度も家臣達は諫めたにも関わらず、改まることはなく、臣下達の手に依つて弑されました。」

次々と歴代の王達の話をしているのを、ティアアナは後ろで目を閉じて、静かに聞き入っていた。

「続いて、先代国王についてですが、よく知つておいでのお方がい

「いらっしゃいますので、特別に講師を頼みたいと思ひます。  
ティアナ様どうぞ前へ。」  
閉じていた目をゆっくり開けて、立ち上がった。

してやられた。

日頃の恨みを晴らせて気分の良さげな、ジルに苛立ちを感じたが、仕方がないなど、何から話そうかと考えた。

先代の王、父について私は知らないのだ。

民の方がよく知っているくらいだ。

父には子供が私しかいなかつた。

いくら父が母を寵愛していようが、身分の低い母が后になどなれなかつたし、母も望んではいなかつた。

それが気に入らない者達がいて、危害を加えられる事を危惧してか父には年に数回しか逢えなかつた。

母が亡くなつてから、生活が一変した。

日替りで講師が付き、勉強漬けになつた。

何故かと問えば、国の為に勉強しなさいと言われた。

毎日必死で勉強に励んで、周りの事を把握する余裕がなかつた。

父が亡くなり、國を受け継いだ時、王を偲ぶ民の声が多く聽こえた。

父は王だつたんだなと改めて感じた。

会うときはいつも父親の顔で、王の顔を見せてくれたことはなかつた。

どんな王であつたか知らないと、初めて気づいた。

傍に居たのに、何でこんなにも解らない？

何で？ なんで？

そんな疑問も忙しさを理由に忘れていった。

「…………、…………か、陛下！！」

はっと眼を開けば、訝しげにこちらを伺う宰相ジルの顔が目に入つた。

「どうかなさいました？」

「すまない。ちょっと…、」

大丈夫だと安心させようと、動いたら目眩がした。手を机につき、不様に倒れるのは防いだ。

「陛下！？」

「ティアナ様！！」

座り込み、大袈裟に手を降つた。

「大丈夫だ。

ただの立ち眩みだ。」

「医師を呼んで参りますわ！！」

リリアが席を立ち足早に出ていこうとするのを、国王ティアナは止めた。

「大事ない。」

「しかし、ティアナ様に何かありましたら…」

宰相ジルを手招きし、耳元で何事か話すとジルの顔が強張つた。数刻考えると頷いた。

「分かりました。

お部屋まで、お送り致します。

皆様申し訳ありませんが、今日の授業はこれまでです。

明日続きを行います。」

ジルは、淡々と語りつゝトライアナに手を貸しゆつべつ部屋から出てこ  
こつとした。

「お待ち下さい。

本当に大丈夫なのですか？」

カイルが、心配そうな声で聞いてきた。

「あ…、ただの立ち眩みだ。」

部屋を出る前に、ジルが思い出した様に念を推していくつた。

「この事は他言無用です。

よろしくですね。」

皆が頷いたのを確かめて部屋を後にした。

部屋に残された四人は、それぞれ心配していた。

「ティ、ティアナ様、本当に大丈夫だったのでしょつか？」

部屋の中を意味なく歩き回っている。

「ビルズ、心配なのは分かるが落ち着け。」

酷く落ち着きがないビルズに、カイルが優しく声をかける。

「私達がいくら心配などしても、ご本人に大事ないと言われてしまつてはどうしようもありませんわね。」

アマリリストは頬に手をあて、ため息をつく。

「そうですわね。」

顔色が悪い様に見えたので、貧血かも知れませんわ。

私も時々なりますもの。」

リリアは、所謂女の事情ではないかと暗に可能性を示してみた。

「まあ。」

と、女子一人は色々と盛り上がった。

話についていけなかつた男子一人だが、聞こえてくる内容に何となく察した。

居たたまれなくてカイルは、ビルズに目で合図し、そつと部屋を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6663z/>

---

世継ぎ問題（仮）

2012年1月10日21時47分発行